

せきぞうたそうとう
石造多層塔

種 別	小松市指定文化財 建造物
指定年月日	平成9年11月3日
所 在 地	滝ヶ原町（八幡神社）

本件は、滝ヶ原町八幡神社の境内に存在する凝灰岩製の層塔である。

基礎は高さ43センチメートル、幅、奥行きが40センチメートルを測り、その上に五層の屋根が重ねられる。最も下の軸部には、蓮華座を持つ円相が彫られ、円相の外輪には小さな蓮弁が配される。この装飾は「越前式装飾」と呼ばれ、鎌倉時代後期から近世初頭にかけて、越前を中心に北陸地方に分布するものである。加賀では、加賀市山代温泉薬王院の五輪塔や、金沢市普正寺遺跡の五輪塔などにみられる。

本件ではこの円相の内に阿闍如来の種子⁽¹⁾「𑖀(ウーン)」と不空成就如来の種子「𑖀: (アク)」が確認できることから、四面には金剛界四仏⁽²⁾が彫り出されていたとみられる。

造立時期は、越前の鎌倉時代の層塔と比べると屋根の反りや軒口の傾斜、屋根の軸部の縦長化などの後出的な要素がみられる。よって、造立年代は14～15世紀とされるが、近年、14世紀初頭とする説も提示されている。

加賀地方において、良好な状態を保つ唯一ともいえる層塔である本件は、中世南加賀地域の石造文化や宗教文化を考えるうえで、きわめて貴重な資料といえるだろう。

(1)「種子」：密教における仏ごとのシンボルとなる一音節の呪文。

(2)「金剛界四仏」：密教で中心となる大日如来を囲む四方の仏。東の阿闍如来、南の宝生如来、西の阿弥陀如来、北の不空成就如来の四仏。

